

# 基礎情報学研究会報告

株式会社 高陵社書店・基礎情報学研究会幹事  
高田信夫

## 1 基礎情報学研究会とは

「基礎情報学研究会」は、もともとは西垣通先生を中心に先生の基礎情報学をベースにして高等学校や大学の情報教育の改革をめざして始まった研究会であり、2012年11月に発足した。

発足後第1回目の研究会に情報システム学会の芳賀正憲氏が出席されたことをきっかけに、芳賀氏と基礎情報学研究会メンバーとの交流が始まった。交流が深まるとともに、基礎情報学の「社会や人間と情報の関係を明らかにし、情報社会で生きていくための基礎的な教養や知識を身につけることが重要である」と考える視点」と、情報システム学会の「人間中心の情報システムを志向し、ビジネスと研究領域の融合や、情報システム人材の育成を目的とする」という点が一致しているため、芳賀氏から情報システム学会への入会と情報システム学会で常設の研究会を立ち上げることを提案された。そこで、基礎情報学研究会のコアメンバーである西垣通先生、中島聡先生、高田信夫の三名が入会し、2013年5月に西垣通先生を主査とした情報システム学会の常設研究会である基礎情報学研究会が発足した。

## 2 研究会報告

研究会は、基本的に2ヶ月に1回行われる。この11月までに3回行われた。毎回あるテーマを決めた形で講師の方にお話をいただいたあと、西垣先生の基礎情報学的な観点からのコメントをいただき、そのあとは参加者全員による討論の形をとって進めている。

### (1) 第3回基礎情報学研究会

(「第3回」とあるのは、情報システム学会の常設研究会になる前に、すでに2回の研究会を実施していたためである)

- ①日時：2013年7月20日(土) 14:00～17:00
- ②場所：コンピュータソフトウェア著作権協会会議室
- ③参加者：24名
- ④テーマ「著作権と基礎情報学」
- ⑤講師：久保田裕(コンピュータソフトウェア著作権協会専務理事・事務局長)
- ⑥講演および討論の内容

講師の久保田先生から、著作権とは何かから始まって、アメリカとヨーロッパの著作権の考え方の違い、著作物を利用する場合の注意、引用について、学校での著作物の利用についてなど、著作権全般についての解説があった。

それを受けて討論に入ったが、参加者から、「コンピュータのプログラムは著作物と言えるのか」とか「著作物の許諾はどのようにとったらいいのか」をはじめとして、さまざまな意見が出され議論は白熱した。

#### ⑦今後の課題

議論そのものは大変白熱して研究会はおおいに盛り上がったが、今回のテーマに掲げた「著作権と基礎情報学」ということについては掘り下げることができなかった。これは、多くの参加者にとって、著作権およ

び基礎情報学というものがまだ完全に理解されていないために、著作権と基礎情報学の関係について掘り下げることができなかったと思われる。

この著作権というテーマについては、さらに学習を進めた上で再度取り上げてみたいと思う。

## (2) 第4回基礎情報学研究会

①日時：2013年9月14日（土）14：00～17：00

②場所：コンピュータソフトウェア著作権協会事務所

③参加者：16名

④テーマ「IT技術者のウェル・ビーイング（心の健康）」

⑤講師：三村和子（放送大学大学院）

⑥講演および討論の内容

講師の三村先生からアレキシサイミア（失感情症）という心の問題を抱えるIT技術者が増えていることと。それについてのいくつかの事例が報告された。さらに、IT技術者のウェル・ビーイングについてオートポイエシスの観点からの分析がなされた。

それに対して西垣先生から以下のような指摘がなされた。

- ・アレキシサイミアの人が感情認知・言語化に困難を生じるということは、基礎情報学でいうところの観察者問題であると考えられる。
- ・アレキシサイミアの人は対人対応ではなく、ITへの過剰適応が強い人だと考えられる。これは、唯一神の考え方あるいは米国ITとディープカルチャーの差に関係している。
- ・アレキシサイミアの人は、相手の気持ちに沿って考えようという習慣を失っている。青年期の経験不足が関係していると思われるが、これは心の意味データベースが貧弱であると捉えた。
- ・成果メディアがうまくいかないと、心の働きがうまくいかない。アレキシサイミアの人は成果メディアが狂っているのかもしれない。

また、その後の討論では、次のような意見が出された。

- ・企業におけるメンタルヘルスの扱いでは、心の問題をすぐに専門家に任せてしまう傾向があるが、心の問題の相談を途中で受ける体制が必要ではないか。
- ・スマホなどの普及により育児場面での情報機器の扱いが問題になってきている。幼児のうちから情報機器に触れていると、健全な五感が育たないのではないかという不安がある。
- ・大学などの教育機関でのメンタルヘルス上の精神的不適応者への対応の変化。

⑦今後の課題

アレキシサイミアの問題については、今後も実際のIT技術者の現状を踏まえながら、基礎情報学的なアプローチを考えていく必要があると思われる。

## (3) 第5回基礎情報学研究会

①日時：2013年7月17日（日）14：00～17：00

②場所：コンピュータソフトウェア著作権協会会議室

③参加者：19名

④テーマ「情報システム学の新たな展望—基礎情報学との対話を通じて」

⑤講師：中嶋間多（法政大学教授）

⑥講演および討論の内容

講師の中嶋先生から、今までの情報システム学研究の歩みを振り返りながら、慶應大学での浦昭二先生と

の出会い、基礎情報学との出会いが語られた。そして、今後の情報システム学の新たな展望に向けて、基礎情報学に対して次のような問題提起がなされた。

- ・ 実践性の追求：応用情報学ないし実践情報学の構築
- ・ ルーマン社会学の視座の是非→社会学を超えて
- ・ 中範囲理論（組織やコミュニティを対象）の構築

その中範囲理論の具体的な例として、中嶋先生が現在取り組んでいる地域活性化が取り上げられ、マーケティング、イノベーション、ブランディングについての話があった。

さらに、今後の基礎情報学を考えるにあたっては、大東文化大学の内山研一先生のアクションリサーチ的な考え方や野中郁次郎先生の SECI モデル（暗黙知と形式知の交換と知識移転プロセスを表すモデル）などが参考になるだろうということだった。

それに対して、西垣先生から次のようなコメントがあった。

- ・ 基礎情報学に対して実践性を取り入れるというのは賛成である。
- ・ 中範囲理論ということで、地域活性化という問題には、集合知が関係してくる。集合知はスーパーの仕入れの数のように答えがあるものに対しては有効であるが、ダムを作るべきかというような答えがないものに対しては有効であるとはいえない。今後、答えがないような問題である公共哲学と基礎情報学の関係を考えていきたい。
- ・ 近代は合理主義から発しているがそれではだめであり、身体知や暗黙知から出発しないとだめである。
- ・ ブランディングについて言えば、ブランドは社会から見たときにどのように見えているかを考えるべきである。

その後の討論の中では、地域活性化に向けて地域の住民に地元愛をもたせ、いかに若者を参加させていくか、そしてその集合知をどう活用していくかという問題についての意見が出された。

それに対して、若者を地域活性化に参加させ集合知を活用していくためには、いまの高校生のコミュニケーションの形を変えないといけない。いまの高校生はスマホだけの世界にひたっていて、集合知がまちがって動いてしまっている。それでは地域活性化に貢献しないだろうという発言があり、それに関連して教育の問題にまで議論が広がっていった。

#### ⑦今後の課題

中嶋先生から問題提起があった、組織やコミュニティなどの実際の社会の問題解決への基礎情報学の応用についても検討していく必要があると思われる。